第 22 回雅楽部海外公演

佐藤浩司

去る９月６日より 18 日の間、雅楽部は、オランダ、ドイツ、フランス、イギリスの４カ国、５都市、６会場にて、22 回目となる海外公演を行った。いずれの会場も、管絃、謡物（催馬楽）、舞楽の古典に加え、ヨーロッパでは初めての伎楽を加えて、大勢の現地の方に喜んで頂いた。

今回の旅行は、国際線以外は殆ど長距離を貸し切りバス、現地では通常の交通機関を利用しての移動であった。経費を安く上げるというのが一番の理由であった。しかし、実際に平面を移動してこれまで気付かなかったことを多く学ぶことができた。なによりも先ず、車窓に繰り広げられる風景である。同じヨーロッパでも、歴史と文化が違えば、風景に違いがあり、それが見えてくるのである。現地の方々が日常利用しているバスや路面電車や地下鉄を利用すると、現地の生活を肌で感じることができるのである。これは何よりも得難い経験であった。

私たちが 1995 年にヨーロッパにおける演奏旅行を行ったのは３月のことである。その１月 17 日に阪神淡路大震災が発生している。今回は、東日本大震災である。多くの被災された方の心中、いかばかりかとお慰めする言葉もなく、今はただ、一日も早い復興を祈念するのみである。阪神淡路大震災の折には、訪問国における公演会場では義捐金を募って下さり、現地の兵庫県事務所の方へお渡しした。その後、雅楽部では、世界で起こった災害に注目し、日本国内での公演の折に義捐金を募り、日本赤十字社を通じて、寄付させて頂いている。今回は、訪問した各国とも、早々にお見舞のメッセージと共に多額の義捐金と物資並びに人的援助を寄せて下さっているので、私どもは、いわばお礼の意味をこめた公演とさせて頂いた次第である。

今回の震災は、福島にある東京電力の原子力発電所が被災し、放射能汚染という目に見えない災害に遭遇し、未だに解決に至っていないという悲惨な事態を招いている。原子力発電の是非、代替エネルギーの模索など、識者のみならず喧々諤々たる意見がなされ、一般の耳目を集めている。

今回、バス移動によって気付いた、もう一点に触れておきたい。最初の訪問国はオランダであった。周知のようにオランダは風車で有名である。ところが、内陸を走った所為でしょう、風車は全く目にすることがなかった。逆に、ドイツはケルンにむかい、ドイツへ入った瞬間、いたるところ、大きな風車（風力発電用のプロペラ）が林立していた。今度は、パリへ向かうため高速道路を走ると、フランスに入るなり目に付いたのが、原子力発電所の例の鼓の胴に似た建造物である。また、ミュンヘンへ行くためドイツへ向かうと、パリの周辺では見かけなかった例の建造物が国境沿いに並んでいた。ドイツへ入ると、同じく何本（機と数えるのだろうが）もの風車がゆったりと回っていた。ご承知のように、フランスは原子力発電の他の発電に対する比率が世界一である。お隣のドイツに電力を販売しているほどである。日本のように、他国と国境を海上においてのみ接触しているところでは、決して分からない、陸続きの国境を有する国々の苦悩を垣間見たようで、貴重な経験に感謝した次第である。

第 241 回研究報告会（10 月 6 日）
唐代中晩期における蜀の音楽文化

国際学部地域文化学科准教授　中　純子

都・長安中心であると考えられてきた唐代の音楽文化は、中期に起こった安史の乱以降、楽人の流動により、都から地方へと伝播していった。それは今回の発表で検討した蜀地方（いまの四川省）に限られたことではなかったが、蜀は、それ以前から琴の生産地としても知られており、音楽文化を育成する土壌があったともいえる。

蜀の音楽文化に注目するのは、唐代と宋代の宮廷音楽文化の繋がりを考える際に、宋代初期の宮廷音楽を掌る教坊が招集した楽人のうち、蜀から連れてきた楽人が多数をしめており、その重要性が際だつからである。唐代と宋代の間には五代と呼ばれる時期があり、そのとき蜀地方には前蜀・後蜀という二つの政権があった。そこでは、宋代に花開く詞余（音楽にあわせて詩を創作する）文化が一足早く楽しまれ、そのアンソロジーとしては最初の『花間集』が作成され、華やいだ宮廷文化が創造されていたことが知られている。その背景には唐代末の乱による楽人の都からの流入があることは、つとに村越貴代美氏の「後蜀における『花間集』成立の背景」（『お茶の水女子大学中国文学会報』第 12　1993）によって論証されている。今回の発表は、それをさらに時期的に拡大して考えた。蜀の音楽文化の発展が、唐代末からではなく、少しさかのぼって、唐代中期の安史の乱以降徐々に醸成されていったことを、当時の詩作品など資料を使って検討していくことを試みた。

その資料としては、まず安史の乱によって蜀に逃避した杜甫の詩が挙げられる。そこには都から逃れて地方で生きのびる梨園の楽人の姿が描かれている。また、晩唐に書かれた南卓『羯鼓録』には、安史の乱の後、蜀の役人にすぎないものが、都の雅楽をつかさどる太常寺の楽人もわからなくなっていた音楽について教えるという故事が記されている。また、羯鼓の撥を作る匠が蜀にはいたことも、音楽演奏を支える基盤がすでに蜀に定着していたことが窺わせる。こうして蜀の音楽は、乱により荒廃した都の宮廷音楽をも補完するものとなり、都に対する一地方の音楽文化のありかたとして特筆すべきものがあると考える。

さらに中唐期における、蜀地方を牛耳る西川節度使韋皐による「南詔奉聖楽」「驃国楽」の皇帝への献上も、その背景には蜀の音楽文化の成熟があったと考えられる。それらの音楽は、唐代において大々的な音楽をともなう夷狄の朝貢として史書に残されているが、ともに蜀においてアレンジされたことは、『新唐書』などの資料が示すところである。

また、宋代以後発展する戯劇文化の萌芽としても、唐代中晩期の蜀の資料は重要なものである。唐代に残された戯劇についての資料は決して多くはない。そのなかでも注目される資料が蜀に関わる文献のなかに残されていることも、探究すべきことがらである。そして唐末の叛乱によって荒廃した雅楽の復興の担い手として、成都の官僚であった「殷盈孫」が太常博士として取り上げられたことも従来見過ごされきたところであり、以上さまざまな観点から唐代中晩期の蜀の音楽文化を捉えていく必要がある。今後当時の資料から中晩唐期の蜀音楽文化のありかたをまとめていきたいと考えている。

日台国際研究会議「東アジアの死生学へ」に参加

金子　昭

私は現在、台湾の中国文化大学日文系（台北市）に天理大学からの交換教授（客員教授）として赴任している（2012年7月までの予定）。

10月7日、台湾の国立中山大学社会科学院（高雄市）にて、国立中山大学日本研究センター、同文学院、および東京大学グローバルCOEプログラム「死生学の展開と組織化」共催による日台国際研究会議「東アジアの死生学へ」（朝往東亞的生死學）が開催され、私は総合討論においてコメンテーターとして参加した。

この研究会議は、上記東京大学グローバルCOEの企画による国際シンポジウムで、東西の文化的差異をもふまえた死生学をより深め、展開するために、日本の死生学と台湾のそれとの対話を通じて、現代東アジアの死生学をあらためて考えていこうとする試みである。

発表者とそのテーマは、次の通り。

- 竹内整一（鎌倉女子大学教授）「はかなさの感受性―転機としてのクライシス」
- 一ノ瀬正樹（東京大学大学院教授）「東日本大震災後の未体験ゾーン―日本における低線量被曝論争の構図―」
- 林耀盛（政治大学教授）「死生学の台湾における文化的省察」
- 楊濟襄（中山大学準教授）「アジア映画における送葬儀礼の符号と生死の心象―映画「父後七日」（台湾）と「送り人」（日本）の文化的意義に対する比較と分析」
- 池澤優（東京大学大学院教授）「生命倫理と宗教―エンゲルハート再考―」
- 廖欽彬（中山大学日本研究センター研究員）「実践における死生―田辺元の「死の哲学」と慈済の宗教的世界」

これら6名の発表をふまえて、林慶勲・中山大学名誉教授の司会進行の下、総合討論では私が全体の発表について総括コメントを述べ、その内容についての質疑応答を中心に議論が進められた。日本側発表者は死生学について学際的に研究を重ねてきた東京大学及びその関係者、台湾側も死生学研究の理論及び臨床面での最前線で探求している研究者ばかりなので、ずいぶん緊張したが、このシンポジウムに参加することで私自身おおいに得るところがあった。日台の哲学思想・宗教及び霊性文化の今後の交流を促す、とても充実した内容の意義深いシンポジウムになったと思う。

シンポジウム会場（中山大学社会科学院）にて

日本社会福祉学会第59回秋季大会で発表

八木三郎

10月8日～9日の2日間、日本社会福祉学会第59回秋季大会が淑徳大学（千葉キャンパス）で開催された。日本社会福祉学会は一般社団法人化され、昨年度から大会を2季に分け、春と秋に開催されている。今回の秋季大会では「ソーシャルワークの本質を考える―原理的な問いと実践力を創り出すもの」がテーマとなった。

この背景には、近年の経済のグローバル化、規制緩和、競争による発展をキーワードにしたわが国の政策のあり方によって社会経済環境が激変しているなかで、人々の生活様式や意識の変化が顕著になり、ソーシャルワークの対象とする課題も多様化、複雑化している現状がある。

そうした時代にあって、市民生活を取り巻く種々の不安定な要素を取り除き、将来への持続性や継続性を取り戻す社会保障・社会福祉の理論的枠組みのなかでソーシャルワーカーがどのような価値観に基づき、何を目標とするのか等について追及した2日間の大会であった。

筆者は、2日目に行われた自由研究発表「障害（児）者福祉」の分科会で、現在、個人研究のテーマとしている「ユニバーサルデザインにおける障害当事者性」の具体的事例の調査結果について発表を行った。

日本爬虫両棲類学会第50回大会で発表

佐藤孝則

10月8日～10日にかけて、京都大学の吉田キャンパスで標記大会が開催された。筆者は、第1発表者として口頭発表をおこない、第3発表者としてポスター発表をおこなった。

口頭発表の演題は「北海道釧路湿原に生息するエゾアカガエルの越冬場所」だった。この発表では、当該カエルが釧路湿原で越冬するさい、厳冬期でも結氷しない湧水域および静水域を重要な越冬場所としていること、また湧水域の良好な越冬場所へは先に成体が入り、それ以外の成体や亜成体・幼体は静水域で団子状になって越冬すること、さらに越冬に失敗して死亡する可能性が高いのは幼体であること等について報告した。

ポスター発表の演題は「釧路湿原美濃地区におけるキタサンショウウオの活動状況」だった。釧路湿原の低層湿原でおこなってきた当該サンショウウオの活動性研究について、筆者が開発したサンショウウオ用生捕りわな（ピットフォール・トラップ）を用いることが有効であることを実証した。これまでのサンショウウオ類調査では、産卵池に集まる個体を捕獲し、それをたとえばDNA解析するなど、繁殖期でしか個体を捕獲できないという調査上の弱点があった。その弱点を克服し、非繁殖期でも捕獲可能な研究方法であることを示すのが、本発表の目的だった。

天理大学宗教学科研究室・おやさと研究所　共催

諸井慶徳先生 50 年祭記念 公開教学シンポジウム

天理教教義学を語る

今年は、天理教学、とりわけ天理教教義学の樹立を目指された諸井慶徳先生（元天理大学宗教学科教授・おやさと研究所長）が出直されて、ちょうど 50 年になります。このたび、諸井先生の宗教学研究の今日性に注目する新進気鋭の評論家、若松英輔氏をお迎えして、諸井先生に始まる天理教教義学研究の歩みを振り返るとともに、今後の天理教学研究の新たな地平を拓くための契機にしたいと考えています。みなさまには、ぜひご来聴くださいますよう、ご案内いたします。

【日時】**11 月 26 日（土）** 15：00 ～ 17：30

【場所】**天理大学研究棟３階第一会議室**

【プログラム】

開会の挨拶　飯降 政彦・天理大学長

基調講演　若松 英輔（評論家）

「諸井慶徳著『天理教教義学試論』を読む」

事前申し込み不要

入場無料

発　題　「父を語る」

諸井 慶一郎（本部員、天理図書館長）

「諸井先生の学問的態度」

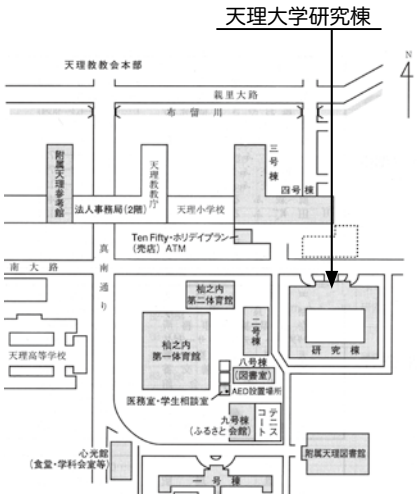
飯田 照明（天理大学名誉教授、天理図書館顧問）

「諸井先生の教義学とその展開」

澤井 義次（天理大学宗教学科主任・教授）

ディスカッション

閉会の挨拶　深谷 忠一・天理大学おやさと研究所長



皆様のご来聴を歓迎いたします。

グローカル天理
第 12 巻　第 11 号　（通巻 143 号）
2011（平成 23）年 11 月 1 日発行

ⓒ Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者　深谷忠一
編集発行　天理大学 おやさと研究所
〒 632-8510　奈良県天理市杣之内町 1050
TEL　0743-63-9080
FAX　0743-63-7255
URL　http://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/j-home.htm
E-mail　oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷　天理時報社
Printed in Japan